

対談

異なる言語と触れあうことは  
どういうことか。そして、言  
葉に蓄えられた富はどのよう  
に受け継がれていくのか。詩、  
エッセイ、翻訳と日本語を  
自在に操る詩人のアーサー・  
ビナード氏と、デビュー作の  
『優しいサヨクのための嬉遊  
曲』から最新刊の『おことば  
戦後皇室語録』まで、一貫し  
て日本語の表現のあり方にこ  
だわり続けてきた作家の島田  
雅彦氏が語りおろした「アン  
チ日本語ブーム」論。

# 言葉に 夢中になる 快樂



人物撮影：高木厚子（以下も同じ）

詩人  
アーサー・ビナード



作家  
島田雅彦

## 「あ、そう」から始まった日本語体験

**島田** ビナードさんが最初に接触した日本語は何でしたか。

**ビナード** 「あ、そう」だったと思います。その意味を知らずに、ただ日本人、というか東洋人の真似をするときは、決まって「ASO！」と言っていました。

子どものころ、デトロイトのUHF局で毎日「ウルトラマン」を放送していました。科学特別捜査隊のメンバーが怪獣退治の相談をしているときに、誰かが「あ、そう」と言っているような（笑）。いや、それは吹き替えになっただけで、「シェワッチー！」だけがそのままだったんだけど、子ども同士で盛んに「ASO！」って真似たりしました。元をただせば、昭和天皇の言葉だったそうですね。戦後、流行語になって、米軍の兵士たちがそれをアメリカに持ち帰ったんです。

**島田** おもしろいですね。占領時代に初めて国民に向かって自分の声で話し始めたときの天皇の言葉が「あ、そう」として記憶されていたわけですね。

**ビナード** 島田さんは、大学時代にロシア語を勉強されたそうですね。

**島田** 僕もビナードさんにとつての「あ、そう」みたいな言葉があるんです。小学校6年生のときにロシア語の「ハラシヨー」という言葉を初めて耳にしました。英語で言うと、goodやwellのようによく使う言葉ですね。「大シベリア展」という展覧会に行つて、そのパビリオンにいたロシア人女性から初めてロシア語を聞いたわけです。

中学生になって、スタンリー・キューブリックの映画『時計じかけのオレンジ』を観た。近未来でバイオレンスに明け

暮れる少年が主人公ですが、彼らが仲間うちで使う隠語はロシア語なんです。英語に混ぜて、「ハラシヨー」って、叫んでいる。「あ、覚えてる。この言葉」と思った。そこで、アンソニー・バージェスの書いた原作の翻訳を買ってきて、出てくるロシア語を全部ノートに書きだして使っていた、というのが始まりですね。

**ビナード** 末恐ろしいというべきか（笑）、すごいところから始まりましたね。大学で本格的にロシア語に取り組み始めたときは、日本語と距離をとるとか、ロシア語を通して世界を見ているとかいう思いはありましたか。

**島田** ありましたね。私自身は冷戦時代の子どもですから、日本にいればアメリカンカルチャーの洗礼を受け続ける。その反動で、ロシア語ができるようになれば、世界征服できるだろうと考えて始めたんです（笑）。

## 文字のおもしろさに導かれて

**ビナード** 僕は最初、ミラノでイタリア語を1年半くらいやって、そのあと5カ月間、インド南部のチェンナイでタミル語に没頭しました。それからアメリカに戻って、卒論を書いていたとき、たまたまエズラ・パウンドの『カントス』という分厚い詩集についての論文に出くわしました。パウンドは英文のなかに漢字をポンと入れたりしますが、その漢字がどういう意味を表わしているかなど、ごく初歩的に説明した論文でした。でもそれが、興味をもったきっかけですね。

**島田** そうすると日本語は、文字に誘惑されたという感じですか。  
**ビナード** そうですね。タミル語も、どこが一番おもしろかったかというところ、アルファベットとはまったく違うその文字。

↓タミル文字で書かれた新聞。タミル語は南インドを中心に、スリランカ、マレーシア、シンガポールなどでも使われる。タミル文字は基本的に子音と母音を組み合わせて書く

タミル語はアーリア系の言葉よりもっと古い言語で、それを勉強するうち、自分がずっとアルファベット中毒の状態でごしてきたことに気づきました。おれは母語依存症なんだと。タミル語もABCと同じ表音文字ですが、漢字は表意文字なので、輪をかけておもしろい。タミル語をやって文字の妙味に目覚め、今度は漢字をやらなきゃ！ と思いました。

**島田** アルファベットは、エジプトの象形文字のアレンジとして始まって、ヨーロッパの文明の基礎になりました。ピナードさんが漢字に出会う体験は、それとまったく逆コースをたどったわけですね。漢字は今も現役で使われている象形文字ですから。

**ピナード** 象形文字は、なんとと言っても多様性が魅力ですね。

**島田** そうですね。日本の子どもたちは12〜13年かけて2500字くらい覚えるので、漢字を含めた日本語学習と考えると、ものすごく時間と手間がかかっているわけです。だから、20歳を過ぎてから、数だけ多い文字を学ぶ人の苦労をいつも想像します。象形文字の感覚がない人は大変でしょうね。

### コレクターの感覚で言葉を生け捕る

**ピナード** その感覚は誰もがもともと持っているような気がします。ただ使っていないだけだと思います。漢字って、組み合わせによってどんどん増やしていきますよね。最初はどのようにって、溺れそうな不安もありましたけど。

**島田** 寿司屋の大きな湯呑みに魚への文字がたくさん書いてありますね。あれを見てみると、まさに組み合わせによって、どんなものでもつくりだしていける感じがある。

**ピナード** こんなにたくさん覚えるなんて嫌だと思ふ人には不

向きですね。僕は逆に「もつとないの？」と思ったりしますけど。

**島田** ピナードさん、もしかして子どものころに何かコレクションするくせがありましたか。

**ピナード** いろいろありました。でも昆虫がメインですね。漢字に親しむためには、どこか昆虫少年じゃないと駄目かもしれませんね(笑)。

**島田** そうですね。漢字は昆虫の種類くらいあるわけですから。

**ピナード** 昆虫をじっと見ていると、それだけで幸せって思える人が昆虫学者になる。

**島田** そして、漢字に惹かれる。

**ピナード** たぶん。日本のほうがアメリカに比べて昆虫少年の数がも多いのも、もしかして言語的な土壌があるからかもしれないですね。

**島田** それはすぐくおもしろい指摘ですね。自然科学を学ぶ態度をみると、漢字文化圏の人間は博物学の方に向いていると思います。一方、アルファベットの文字で育った人たちは、基本的に化学の考え方に適した考え方をします。最低限の元素で宇宙の万物をつくるわけですから。化学の考え方は、漢字の世界からは生まれにくいんじゃないかと思うんです。

**ピナード** 西洋の表音文字は、解剖学にも向いています。しかし、生き物を生きたままに、その全体をとらえるとなると不十分ですね。万物をABCの箱のなかに収めようとするのと、





無理が出てくる。  
島田 そうですね。

## 擬音語、擬態語、ダジャレの日本語

ビナード でも、日本語は両方備えているから、よけいいいんですよね。表意文字だけじゃなく、表音文字もあって。

島田 日本語は2つの世界観が混じり合っていて、どっちにも引き裂かれているようなところはあります。かなは漢字をアレンジしてつくったもので、アルファベットに近いところもある。象形文字である漢字を残して使いながらも、カタカナを使って外来語を取り込んできました。

ビナード そうやって言葉を増殖させる機能は必ずば抜けています。例えば中国語だと、多くの場合は意味と音をどうにか訳して取り入れるということになる。

島田 日本語も明治時代にはいろいろと苦労して、「ニューロン」に「神経」という文字を当てたりしていました。日本でつくった漢字の言葉を中国が逆輸入する歴史もあつたわけですね。

ビナード 明治時代の小説を読んでいると、擬音語や擬態語が漢字で表記してあることがありますよね。「ぐずぐず」を「愚圖愚圖」と書いたり、「すつくと立つ」が「轟然と立つ」だったり。当て字的な表現をつくる、その近代のやり方としても豊かで、現代よりも伸び伸びしていた感じがします。

島田 そうかもしれませんね。明治時代にはカタカナとかひらがなで英語を表記していたこともあつたわけですね。有名なのは「What time is it now?」を「ホツタイモイジルナ」と書

く。聞こえたままをカナにするんですね。外国語を勉強すると、2つの言語でダジャレをたくさんつくりたくなるところがありますよね。

ビナード 自分にしか通じないダジャレ(笑)。

島田 でも、そこがやはりコレクターと共通する感覚なわけですね。ウラジーミル・ナボコフは、ロシア語と英語の両方でのしゃれを集めては作品のなかに取り入れましたが、彼は世界的な蝶のコレクターでした。昆虫好きのビナードさんも、ナボコフと同じようにサウンドも含めて集めようとしている感じがします。ビナードさんの詩を読んでみると、擬音語、擬態語の違いにこだわってらっしゃるでしょう。くしゃみの表現の仕方ひとつとってもね。

## 言語の古層に触れる楽しみ

ビナード 島田さんのコレクションの対象は？ やはり言葉ですか。

島田 僕はあまりコレクション癖はないんですけども、考古少年でしたから、集めていたものというところと縄文土器でしょうね。住んでいたところが多摩丘陵で、高度経済成長期ですから、造成が頻繁に行なわれ、丘を掘れば出てくるんです。大昔の名残に触れる喜びがありましたね。

もしかすると、ビナードさんもタミル語に興味を抱いたきっかけは、古いものに触れる喜びがあつたのではないですか。

ビナード 人間の活動の形跡として、物も残りますが、ほくにとつて一番おもしろいのは言語的な遺跡、言葉の遺物ですね。しかし、いまは言語がどんどん絶滅していついて、生物以上に早いペースで消えている。考古学の対象となる言語は日

しまだ まさひこ●東京都生まれ。東京外国語大学ロシア語学科卒業。83年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。84年『夢遊王国のための音楽』で野間文芸新人賞、92年『彼岸先生』で泉鏡花文学賞を受賞。2003年には代表作たる〈無限カノン〉三部作『慧星の住人』『美しい魂』『エトロフの恋』が完結した。法政大学国際文化学部教授

に日に増えています。

**島田** すごくおもしろい着眼だと思えますね。英語みたいに強い言語が影響力を持つてくると、弱い言語は消えていく。日本語のどこかに縄文の名残があるのだとすれば、どこかで保存したいという欲求は僕のなかにもあります。

### 英語の富が空洞化するとき

**ピナード** ロシアでは、プーシキンから本格的な文学がはじまったわけですよ。

**島田** 文豪が現れたことで、ロシア語がローカルな言語から偉大なる言語に変わりました。かつてはラテン語が雅語として文学や学術言語でしたが、例えばダンテがトスカナ語で書くことによってラテン語は廃れた。方言が初めて表現の言語として浮上してくる。どの言語も文学者がそれを用いることによって、永遠の命を与えられたとは思いません。



**島田** 言葉も貨幣も交換の営みを助ける道具で

**ピナード** ただ、永遠とまではいかないかもしれず、ときどき英語のことが心配になります。いつか破綻するんじゃないかって。みんなが英会話を習い、商売の道具として英語を使っているれば、偉大な言語として残れるかという、違うような気がします。

**島田** みんな世界資本主義の競争に参加したくて学ぶという意味では、英語は完全にコミュニケーション用のツールに成り果ててしまっていますね。その反面、表現の豊かな英語の富はどんどん消えてしまいますね。

**ピナード** そのとおりです。問題は「帝国」ですね。帝国は空

洞化していきます。維持するためには支配下におかれた民を絶えず追い込み、搾取しないと成り立たない。しかし、それがやがて言語をむしばみ、潰していく。アメリカ国民の4分の1が、字が全然わからないか、あるいはちよつとしか読めない状態らしい。しかし、読める人もあまり文学を読まない。マーク・トウエインは、質のいい本を読まない人は、字が読めない人と同じだと言っていましたけど。

とにかく、米社会では貧富の差がグラントドキャニオンみたいに広がって、なかが空洞化しています。軍事産業が経済の基盤になり、すべての力が外に向かっていると、それが言語をうつろにしている気がしています。世界中が仕方なく英語を使っています。が、実は世界にとどろくその言語は空っぽになりつつある。シロアリに食われた家のように、根根太が腐って、いつ崩れてもおかしくない。

す。どちらも財産といえますね。アメリカの場合は英語という基軸言語とドルという基軸通貨を守ることを使命にしていますが、ドルを守ることに熱心なのに、英語の富を守ることにについては無頓着です。

**ピナード** わかっちゃいないですね。いま英語が危うい、飢えて脆弱で、力強く見えても実は中身がまずいことになっていくって、ほとんど誰も気づいてないようです。

### 階層による言葉の違いと経験の蓄積

**島田** シェイクスピアは、自身が大衆演劇の座付き作家から始

アーサー・ビナード ● 米国ミシガン州生まれ。コルゲート大学英米文学部卒。90年に来日、日本語で詩作を始める。詩集『釣り上げては』で中原中也賞受賞。エッセイ集に『日本語ばかりばかり』『空からやってきた魚』、絵本に『くうぎのかお』、翻訳絵本には『タンデライオン』『どんなきぶん?』『カー口、せかいをよむ』など

まって、エリザベス女王と話せるほどの地位になりながら、作品には社会の底辺の英語から宮廷のクイーンズイングリッシュに至るまで、幅広い言葉を取り込みました。銀行に国家や社会の富がプールされるように、作品に言語的な富が全部プールされるといふことでしょうか。

**ビナード** 文学バンクにね。そして、言語の空洞化を防ぐためには、金も使わないといけないですね。教育と文学に。

**島田** いまのアメリカでもある程度、階級によって言葉が違いますか。例えば、パウエル元国務長官のように、スラム出身から国務長官の座まで上りつめるプロセスの上では、自分の英語を変えていくということはあるのでしょうか。

**ビナード** テレビの影響で、方言はかなり消えましたが、階級による言葉の違いは色濃くありますね。例えばジョージ・W・ブッシュのような「お坊ちやま」であれば、そんな言葉の修業、自分の英語の再構築は、やらなくてもいいわけです。息子であることのみで、上つていけるわけですから。

**島田** なるほど。言葉を学び直す機会がなかった。

**ビナード** しかし、去年の大統領選の対立候補だったジョン・ケリーは、蝶よ花よのハイソサエティでも、ある程度の修業は積んでいます。選挙になると、どちらが国民にとって言語的に親しみやすいかという問題になる。テレビから伝わる発言に限っていうと、悲しいことにブッシュのほうが貧しいが故にみなさんに近いです。表現力があり、正確に話せるということは選挙のとき、不利に働きます。

**島田** 日本もそれに近づいている。

**ビナード** 英語は戦後、ひどく変わって、でもある意味では、

予想どおりの道を歩んでいる。そのひそみに倣って、日本語もうつろになつては困りますね。

## 海外小説が読まれないアメリカ

**島田** 例えば、金持ちよりも詩人のほうが偉かった時代があったと思うんですね。人の心を打つ詩を書く人は社会にも尊敬され、地位が与えられるし、モテモテになるわけです。最近までロシアはそうでした。社会主義国でしたから、お金を持っていることよりも、本当は読んではいけない発禁本を1冊持っている、読める権利を持つことのほうが偉かった。

**ビナード** 詩集の初版部数も多かったようですね。

**島田** もうびつくりするくらいでしたね。昔は発禁本は原始的な方法でコピーするわけです。カーボン紙を挟んでタイプを打つので、1回に2部しか増えない。地下ではそれで2万部、3万部と流通したわけですね。ところが、今では詩集を出しても3000部も売れない。資本主義になったとたんに詩集がまったく売れなくなり、いわゆる翻訳物、そのパクリも含めて、パルプフィクションがたくさん出回り始めた。

**ビナード** アメリカでは翻訳の小説はあまり読まれないですね。翻訳本は米国で発行される本全体の、たしか3%に満たないくらいです。日本では半分近くでしょうね。だから、多くのアメリカ人は、英語で書かれたものばかり読んで、鏡を見て喜んでいるという状態です。

**島田** 海外文学では村上春樹が一番読まれているといわれています。



島田雅彦氏、アーサー・ビナード氏の近著より。島田氏の『おことば』は皇室関係者が残した言葉から戦後日本を考える試み。ビナード氏の『日本語ほこりほこり』は日本語表現のおもしろさにこだわった好エッセイ



ますね。彼の小説は英語に訳されると、まるでアメリカの作家が書いているように見えますから。それでも1万部くらいです。

**ビナード** フランス人のほうが、はるかにたくさん外国文学を読んでいますね。ニューヨークは世界金融の中心地ですが、文学は今もパリかもしれません。

**島田** 去年、アメリカの大学のプログラムに参加しましたが、来ている作家たちも自分の著作をリュックに入れて、買いませんかと商人みたいなことをやっている。そうやって売れるだけしか売れない状態ですね。

## 言葉を学び直していく努力

**ビナード** 僕が日本に来たのは1990年ですが、この15年の間に外国映画の題名を和訳しなくなりしましたね。昔はハリウッド映画の日本語タイトルは、原題とはずいぶん違っておもしろかったのに。

**島田** 'Love in the Afternoon' という原題に『昼下がりの情事』とつけるとかね。

**ビナード** 最初は、そんなふうに訳していいのかと驚きましたが。しかし、最近では全部カタカナですね。『コラテラル』とか、そのままでは何の意味かわからない。意味じゃなくて、雰囲気かな。そのほうがかっこいいという……。

**島田** 本当にかっこいいのかな。こうした流れにはちよつと疑問を抱きますね。

**ビナード** 日本では翻訳書も多く出て、本がかなり読まれてい

ますけど、空洞化という点では日本語も安心していただけないと思います。過去の文学とつながっているかどうか、大きなポイントです。かなり危ないところまで来ているかもしれません。例えばハリウッド映画に落語とそっくりの場面が出て。それを取り上げているのに、誰もコメントしない。古典落語を知らないのか！ っと思ったりします。

**島田** 言葉は結局、学び直していくしかないんですね。言葉の富を保存していこうと思つた場合、暇だけはいっぱいあるようなところで全集でも読むのがいいかもしれない。

**ビナード** しほって、徹底的に読むことが大事ですね。自分の作品になつた錯覚が起きるくらいまで、いいものを読むという体験が必要で、書き手だけでなく読み手にもね。そうした意味では、いまの日本語ブームはかなりお粗末。

**島田** 斉藤孝などを見ていると、実演販売のようですよ。 **ビナード** 本当ですね。ハウツー的な切り口で売りさばいて。1カ月で英語が話せるようになるという本と同じ次元のものが多く、日本語切り売りブームにすぎない。本物の日本語ブームは、「これは傑作！」と、読者が唸る新しい日本語が生まれるときです。

**島田** 言葉やその富が保存されるのは、言葉にかまけることに快樂を見出す人がいることですね。言葉をコレクションする作業を止められると病気になる人がいるわけですね、ビナードさんみたいに（笑）。しかし、それは金に替えられない快樂です。そこには生き残りの道はないのかもしれない。

**ビナード** それで、もしかしたら100年後に誰かおもしろがってくれる人が現れる。そこには言葉の保存術も、その意義も潜んでいます。☺

（2005年6月7日収録）